



中舞鶴の歴史・くらし探検隊 活動ニュース

第9号

発行 平成28年8月25日

編集 中央公民館

舞鶴市字余部下1167

28年度 第3回まち探検 余部上の古地図と 庄屋・井上家

「中舞鶴の歴史・くらし探検隊」（中央公民館事業）の28年度第3回活動のテーマは、余部上の古地図。はじめに、市郷土資料館の小室智子氏から「舞鶴市の古地図」の概要を学んだ後、元庄屋の井上家に大切に保管されている絵図を拝見するため、7月10日、文化財の専門家とともにご自宅を訪ねました。絵図のほか、鎮守府開設に関連する古文書や、明治22年に建て替えられた本宅についてもご説明いただきました。（次ページに続く）



▲畳八畳分もある余部上村大
全図（縮尺は1/600と推定）。
地番、地目、面積等が記載さ
れている（上）。左は全図の部
分（28年7月10日、井上家）



▲明治22年に建替えられ
た井上家の本宅（写真上）。
玄関の右隣にある、偉い人
を出迎えるための「式台」
（同右）

ミニ座学「舞鶴市の古地図」

小室智子氏（市郷土資料館）〈要旨〉

江戸時代に村の様子を描いた絵地図は希少。明治初年、地租改正に伴い各村の絵地図が作られた（村によってはこれが最古の地図であることが多い）

地租改正時に全国各村で作られた絵地図には、土地一筆一筆の所有者、面積、地目が表示されている。舞鶴では31か村で確認されており、中舞鶴では余部上村と和田村のものが残されている。

「舞鶴地域の文化遺産と活用」（2016年3月発行、京都府立大学文学部歴史学科）には、古地図を元にした研究の成果が収録されている。

中舞鶴の歴史くらし・探検隊の公開講座

「中舞鶴の商店街の移り変わり ～中舞鶴実業会のあゆみ～（仮題）」

28年9月4日（日）午前9～11時

中央公民館・視聴覚室（1F）

中舞鶴の歴史・くらし探検隊では、公開講座「中舞鶴の商店街の移り変わり～中舞鶴実業会のあゆみ～（仮題）」と題し、中舞鶴実業会の村川巳之助氏と谷岡年夫氏に、写真等をもとにお話を伺う計画です。

入場無料。申込不要。多くのご参加をお待ちしております。

鎮守府建設・市街地工事書類

榎川の付け替えもわかる



古地図のほかにも、
鎮守府開設に関連
した書類等を拝見
(左)



鎮守府開設に伴う市街地工事
書類(右上)。道路や河川改修
(榎川の付け替えも)の契約書
(右)や図面(上)などが綴られて
いる



庄屋の風格、手入れの行き届いた庭



本宅への石段(左)。
屋内から見た庭(上)

■ 拝見した絵図・書類(主なもの)

▽余部鎮守府附近新市街地平面図(縮尺1/6,000)

現状に道路等の計画を記入した複合図

▽京都府下丹後国加佐郡餘部上村地誌大全図

畳8畳分(縮尺は1/600と推定)

▽市街地工事書類 明治32年4月 余部上

道路開設工事設計書、河川付け替許可書(明治34年10月、舞鶴要塞長官)、工事請負契約書(榎川改修工事)、榎川改修工事設計書図と同一札書などが綴られている。

＜古地図と井上家 拝見後の感想＞

▽絵図や文書の保管状態がとても良かった。
▽明治初期の地図を見ることができてよかった。わくわくしながら行きましたが、期待どおり。

▽今回は、元庄屋という歴史ある家屋及び古い記録書物の拝見ができ大変有意義であった。
▽井上家のご当主、奥さまのお話を伺う中で、地域の名士の心構え、心意気等を感じることができ非常に良かった。実物の資料が拝見できたのもうれしかった。

▽素晴らしいの一言。中舞鶴の誇りとして地元の人、特に子供たちに知ってほしい。

▽古地図にある「芝草山」の実態を調べたい。
▽中舞鶴の移り変わりについて子供たちに興味を持ってもらいたいが、その前にまず、大人に興味を持ってもらって、子供たちに伝える資料をつくらないといけない。

▽現在の主屋は明治22年の建替えではあるが、江戸時代の殿様をお迎えすることは終わっているのに、そのようなきちとした人を迎えるための式台や便所が造られている。

▽見学終了後、心豊かに帰ることができた。ご当主や奥様が、家を守り伝えて行こうという、背筋を伸ばした美しさに感動したから。
▽地図は平面的なもの。現地に行くと井上家は少し高台にあり青葉山が見えることが分かる。

▽100年前の器・菓子椀で初めていただきお姫様心地でしたし、ご当家のお心遣いがとてもうれしかった。

＜探検隊活動に期待すること、自由意見＞

▽今日のように古地図や古文書を見る機会があればぜひ参加したい。

▽古文書や地図は“地域の宝”という話があったが、貴重な資料や文化財を残し受け継いでいくことは大変なご苦労があるだろうと感じた。

▽引き続き、多方面から歴史に接する探検隊を構築していきたい。

▽今はやりの古地図で探検をしてみたい。年代の移り変わりにあわせた地図を製作してみたい(無理かな?)

▽井上家をはじめ古民家の蔵にある写真などを見てみたい。

▽榎川の改修工事にまつわる資料を見ることができたのが、今回の最大の収穫だった。地図の大きさ、緻密さに驚かされた。

▽これまで外から家を拝見していただけだったが、本日見学できて大変良かった。資料も珍しいものと思った。

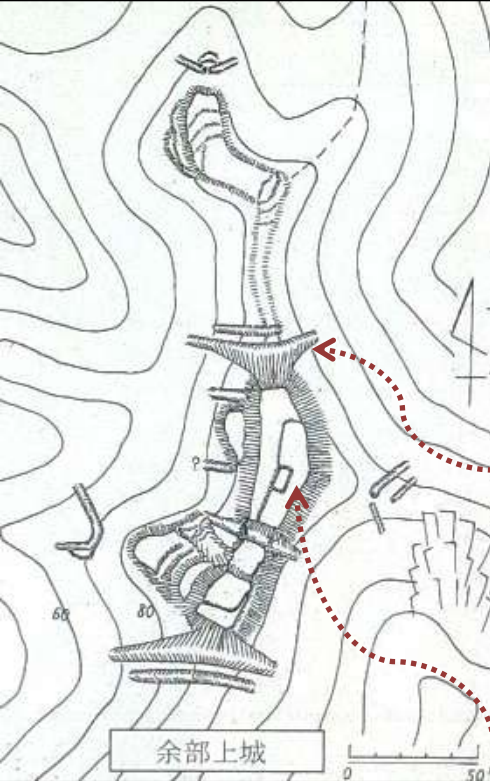
28年度 第2回まち探検 中舞鶴の山城

6月5日に実施した28年度第2回活動のテーマは「中舞鶴の山城探検」。はじめに中央公民館で舞鶴山城研究会の廣瀬邦彦氏 会長から「中舞鶴の山城」題して説明いただいた後、余部上城を見学しました。廣瀬会長の講演概要や探検の様子、参加者からの質問・感想等を報告します。(次ページに続く)

山城位置図



「舞鶴の山城～戦国時代を訪ねる」(舞鶴山城研究会発行)より



▲徒歩で余部上城へ。鉄塔の方向に山城跡がある



▲深さ7mの堀切を登る



▲余部上城の主郭



▲山城研究会の廣瀬会長からの山城の概要を学ぶ(28年6月5日)

＜廣瀬会長の講演要旨＞

舞鶴の山城が造られたのは戦国時代。中舞鶴には、余部上城や、余部下村城、昨年見つけた余部後山城、和田城、和田芋谷城、菖蒲丘城などがある。

今回見学する余部上城の特徴は、城の南北に堀切～それぞれ高さ7メートルと6メートルものすごいものがあること。また堀切や曲輪などが比較的きれいに残っており、見学には適した山城である。

山城に関する質疑応答

Q. 中舞鶴や舞鶴に山城が多いのはなぜ?

A. 調べられているかいないかの違いがある。山城の役割も、戦いだけでなく、見張りの場所、避難の場所などいろいろ。また攻めてくるのは、戦いだけではなく、収穫時期を狙ってくることも。村の形成は室町から戦国時代になってから。村と村の争い

や結びつき、排除、領主による村々の支配? など色々考えないといけない。

Q. いくつかある山城も、その築造時期や使われた時期も異なるのではないかと思う。

A. 全くその通り。造られた時期、目的も違う。浜村城主の桜井氏は水軍、矢野氏も水軍、織田信長の命で働いたこともある。海との関わりもあったはず。

山城探検の感想

▽中舞鶴小学校が総合的な学習の研究校となった。子供たちが興味のあることを主体的に学ぶ探究的な学習～アクティブラーニングを進めていく。子供たちがやりたいことをやることになるが、山城にも興味を持ってもらいたい、子供たちを連れて行きたいと思った。

→山城研究会：子どもの頃に遊んでいたところが山城であった。そんな身近な山城に興味を持ってもらうことはとてもうれしい。

→山城研究会：“竹田城（兵庫県）に行ったけれど地元の山城のことは知らない”のはとても残念。500年ほど前に造られた身近な山城を知ってほしい。裏山にある山城を知ることで、昔の道や川はどうなっているのか、我々が住んでいる土地のことを知りたくなる。その中で、我々は歴史の中に住んでいることに気づくことになる。

▽こんなに身近な所に山城があったことに驚き。市民新聞の連載記事は見ていたが、実際に見てみて山城のイメージがわいてきた。

▽山城への道は、思っていたより草が少なく、森の中を歩いているような雰囲気でも気持ち良かった。みんなで山城まつりができたらいいな。

▽現地には鹿の糞がたくさんあった。下草も少ない。鹿が増えているのだろう。木には熊の引っかき傷も見られた。

山城探検 途中で見つけたもの

余部山城への探検途中で見つけた遺構や植物などを紹介します。



銃座跡。戦前、舞鶴要塞を守るために設置されていた

尾根道に生えていたヒカゲノカズラ(シダ植物の仲間)



山城跡にはシカの糞がたくさん

【お願い】

掲載内容については、今後の探検活動の中で、追記・修正等を行いたいと考えております。情報提供をお願いします。

続・中舞鶴の地名を考える

～舞鶴の地名 その①～

前回までは中舞鶴の地名について考えてみた。特に、「余部」に対する私の見解は「海部の民」を意味するもの、というものであった。そして、その場合の海部とは一般的な呼称ではなく、天の王朝、東表国を代々治めてきたクリタシロスこと海部知男命を指す、とも述べた。これらは今まで誰も指摘したことがない。この王朝は弥生後期には狗耶韓国(くやかんこく)と金官加羅に支配地域を縮小しながら存続していくのであるが、この辺の歴史事情については本題から逸脱するので別の機会に譲りたい。ただ我が国の歴史研究ではこの辺の歴史が曖昧模糊になっていることだけ指摘しておく。大君という地名までが存在する舞鶴。一体、我々が住んでいるこの舞鶴の古代は如何なる姿をしていたのか？

それではまず5部族が渡来してくる前の弥生中期以前の

舞鶴の様子を地名から探ってみよう。

<多祢山と赤野>

種子島は古代の一大貿易センターであった。北の十三湊を結ぶ日本海ラインが古代のシーラインであった。その間に出雲があり丹後があり能登があった。そして種子島では宝満池を中心に赤米の生産が開始された。日本で最初の米の育成がスタートした瞬間である。古代にあっては赤米が中心であった。この記念すべき地名が舞鶴にもあった。種と多祢、漢字はすべて当て字であって、TANEという呼称だけが重要なのである。種子島から船により運ばれてきた赤米。そしてその赤米を携えて舞鶴湾に入り、上陸した場所が赤野であり、水稻栽培に欠かせない豊かな水を供給してくれた山にTANEと命名したわけである。よってTANEとは赤米のことであり、この地に上陸したのは蛇族(南加)であった。なお宝満池は「たからみつ」と読むのが正しい。

(井本精一)